

算 数 通 信

テーマ：能動的な学び手を育てる

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

4 月から、〈算数科の楽しさを味わう授業づくり〉を目指してきました。たくさんの授業参観を通して分かったことは、授業へ楽しんで参加している学級には共通したところがあることです。

1 対話のある授業を行っている。

対話のある教室は、静かではありません。質問がよく出てきます。「なんで」、「なるほど」、「わかった」等の発言が多々あります。しばしば教師が求めている考えとは違う発言もされます。その際、対話を重視しない授業では、正答が重視されます。正答重視の授業は、研究授業などで、立ち往生することが多いです。対応の仕方が分かっていないからです。まず対話のある授業を行う教師は、そのような発言を無視しません。必ず「なぜ、そう考えたの？」と問い返しています。なぜなら、意見表明の段階では、正解も、間違いもないからです。そして、考え方を交流している間に、自然と「正解だった」、「不正解だった」が子供ながら分かってきます。そんなとき、「まちがった」と感じている子供の考えを授業に位置付けます。考えの一部分ですが授業の中で位置付け、プラスの評価言を出します。「〇〇君は、ここでこう考えたんだね。すばらしい。」。また「がんばろう」と思える対応です。

2 協働的な学びがある。

自力解決が始まると、先生の指示がなくても、あちらこちらで子供どうしの交流が始まります。一般的には、自力解決の時間は、自分一人で解決することと捉えられてきました。しかし、子供たちの姿を見ると、「自力」よりも「解決」にウエイトがあるようです。自力解決と言うよりも問題解決の時間と捉えた方がよいのかと思います。子供たちは気軽に相談できる関係を作っていて、それが授業参加への手助けにつながっています。算数が苦手な子供でも、交流し易いと友達の考えを自分の考えとして持つことができるので自信満々で発表していきます。理由を問われたら、初めは上手く答えられなくても、発言をくり返せばいずれ上手くなるでしょう。また、一人で問題に向かっている児童もいます。そのような児童をみると、教師は、同じ考えの子供を紹介して、子供と子供をつなぐことを行っています。しかし、自力解決の時間に、子供同士が交流することを嫌う先生もいます。そんな学級の子供たちは目立たないように振舞っています。意見発表は避けようとしています。発言した後の孤立が予想できるからです。勉強の姿とは言えません。教師の対応が、子供たちをそのような姿にしていると感じています。

3 数学的な見方・考え方を子どもから引き出す授業を行っている。

算数科の授業で、児童が大事な言葉を出すまで、なかなか妥協をしない授業を行っています。大事な考えとは、数学的な見方・考え方です。教えようという姿勢とは違う姿勢です。

子供たちは、「参加しやすい授業」「考えやすい授業」「自分にできたと思える授業」を求めていると思います。そういう子供たちの思いを実現していこうではありませんか！

今年も、子供たちに算数の楽しさを味わわせ、能動的な学び手を育てていきたいものです。